えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第95号
平成29年
(2017)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

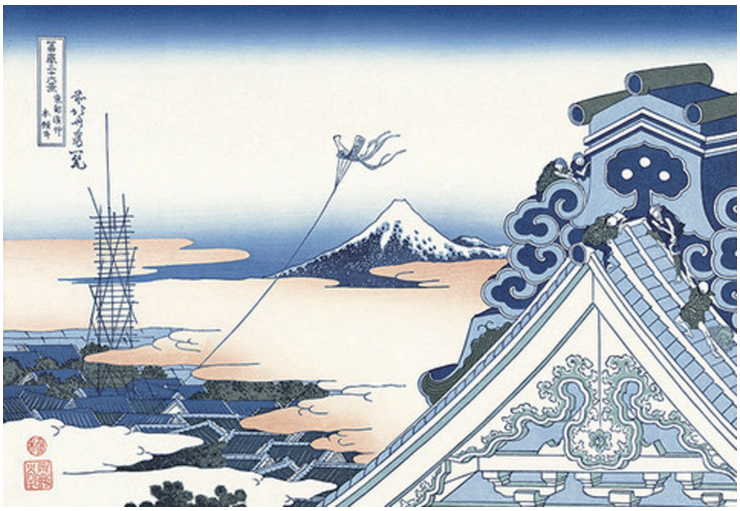
目次

新春特集　墨田に名所がまたひとつ
すみだ北斎美術館開館……1～3
新年祝辞　江戸博藤森館長・友の会畠中会長……3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「お気に入りの浅草」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
友の会セミナー「幕末～明治の深川」……6
友の会セミナー「公儀の庭・浜御殿の変遷と役割」……7
見学会「定番・江戸城周辺探訪―その１(本丸)―」……8
友の会特別観覧会「戦国時代展」……9
江戸博クリップ「江戸博と私」……9
江戸名所図会を歩く…㉙
[駒場野から正一位子の明神社]……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

新春特集

墨田に名所がまたひとつ
すみだ北斎美術館開館

新しい年を迎えました。初夢で見ると縁起が良いとされるのは「一富士、二鷹、三なすび」です。その中の筆頭、富士山は多くの画家に描かれていますが、葛飾北斎の『冨嶽三十六景』を思い浮かべる方も多いことでしょう。平成28年11月22日(火)すみだ北斎美術館が北斎通りに面した緑町公園内に開館しました。



墨田は北斎ゆかりの地

葛飾北斎(宝暦10年・1760～嘉永2年・1849)は江戸東京博物館からも近い、本所割下水といわれた現在の北斎通り辺りで生まれ育ちました。すみだ北斎美術館が建つ緑町公園は津軽家上屋敷跡ですが、藩主からの依頼で、北斎が屏風に馬の絵を描いたというエピソードもあります。北斎は90歳の長命でしたが、引っ越し好きで生涯93回も引っ越しを繰り返しました。

そのほとんどを墨田の地で過ごし、この地を描いた作品も数多いと聞けば、墨田区民はもちろん、親しみを感じる江戸博友の会会員も多いことでしょう。

▲開館当日の朝

▲オープニングセレモニー

難題山積だった建設

平成元年3月、国のふるさと創生事業を受けて墨田区基本計画にその構想が掲げられたことから始まりました。墨田から出た偉大な芸術家を区民の誇りとして永く顕彰することをその目的として、北斎の資料収集が始まりました。しかし、着工間近の平成23年3月に東日本大震災が起きて資材が不足した上に、耐震の見直しを迫られました。さらに埋蔵文化財の調査で土壌汚染や地下構築物が発見され、その対策工事も必要になりました。数々の難題を乗り越えてようやく平成28年4月竣工にこぎつけたのです。

特徴ある建物

清澄通り江戸東京博物館前交差点から北斎通りを５分ほど歩くと、右手の緑町公園奥にすみだ北斎美術館(地上４階地下１階)が目に飛び込んできます。江戸時代を生きた画家の美術館とは思えない斬新なデザインです。同美術館広報担当の方のお話によると、大きな１棟ではなく、スリットにより緩やかに分割された外観とすることで、周囲の下町市街地との調和を図っているということです。地上階のスリットすべてがアプローチ空間となって外部通路で結ばれていて、建物全体に裏がない造りなのです。また、外壁は淡い鏡面のアルミパネルが使用されているため、やわらかな雰囲気を醸して周辺地域の風景に溶け込んでいます。個性は強いけれども主張しすぎない建物なのです。最上階展望ラウンジのスリットを覗くと東京スカイツリーを望むこともできます。

シャープな印象のロゴ

驚くのが美術館のロゴです。黒富士の名でも知られる「冨嶽三十六景山下白雨」は広く知られていますが、ここに描かれている稲妻をデザインしたものなのです。天空にほとばしる一瞬の閃光である稲妻は、大きさや広がりを連想させ、世界に向けて発信するという美術館の理念につながることと、北斎の画業に対する閃きやエネルギーを感じさせるというコンセプトが行われ、いよいよ開館です。

▲ロゴの元になった黒富士

説明をしてくださったのは、前出の担当の方でした。

晴天に恵まれた開館日

開館日当日は11月とは思えない暖かい日でした。開館時間の９時30分を目指して出かけてみると、近隣の小学生による太鼓の披露などもあり大勢の人が集まってセレモニーが始まっていました。コレクションを墨田区に譲渡されたピーター・モース氏の長男、ダニエル・モース氏、建物を設計した世界的な建築家、妹島和代さんはじめ関係者の方々がエ

▲須佐之男命厄神退治の図

ントランス前に勢揃いして、テープカットが行われ、いよいよ開館です。ワクワクしながらチケット売り場に向かうと、窓口にたどり着くまで30分ほど並ばなければなりませんでした。この日やってきた人たちは誰もが開館を心待ちにしていたのでしょう。

北斎を身近に感じる常設展

４階が常設展示室ですが、入るとすぐに幻の大絵馬「須佐之男命厄神退治の図」が高い位置に掲げられています。北斎が86歳の時に描き、弘化２年(1845)牛嶋神社に奉納した扁額で、縦1.2m 横2.8m あったといわれます。残念なことに関東大震災(大正12年・1923)で焼失していましたが、伝統技術と最新技術のコラボレーションにより、100年ぶりにカラーで復元されたのです。メディアでも報道されましたが、晩年に描かれたとは思えない迫力です。

▲北斎の画室

さらに進むと「北斎の画室」があります。弟子の露木為一(生年不明～明治26年・1893)が描いた「北斎仮宅之図」をもとに再現されたものですが、四畳半ほどの紙屑を散らした部屋はリアルです。描いたものが気に入らないと惜しげもなく丸めて捨ててしまう北斎の性癖が表れています。布団をかぶって絵を描く北斎ですが、筆を持つ手が時々動くことに気づいた来館者同士が談笑する光景も見られました。優れた絵師でもある娘のお栄が、すぐそばで北斎の姿を見つめていますが、２人がどんな会話を交わしたのか想像をかき立てられます。

浮世絵は光に弱く傷みやすいため、多くはレプリカによる展示になっています。ここでは作品そのものを鑑賞するというより、北斎の人となりや目指した芸術世界、さらには墨田との関わりを理解してもらうことを

▲人気のタッチパネル

目的としています。文献をめくるように見ることができるタッチパネルがいくつか設置されており、たくさんの方が興味深げに向かっていまし

た。ここでは北斎漫画などにより弟子たちに惜しげもなく技術を伝授していた北斎の姿勢がよく分かります。

見逃せない開館記念展

3階の企画展示室では、開館記念展として「北斎の帰還－幻の絵巻と名品コレクション－」が1月15日(日)まで開催されています。北斎の作品に限らず、貴重な美術品の多くが海外に流失したことは知られていますが、100年余りまったく行方の知られていなかった幻の絵巻「隅田川両岸景色図巻」が発見され、平成27年に墨田区が取得したのです。北斎46歳、壮年期のころの肉筆画で長さ約7mもの絵巻です。その長さには驚かされますが、西洋の技術を採り入れていたという先進的な画法を目の当りにすることができました。

▲隅田川両岸景色図巻

さらに選りすぐりの名品120点が展示されています。なじみ深い『冨嶽三十六景』の「神奈川沖浪裏」や「凱風快晴」は何度見ても飽きませんが、美人画、生き物、静物、挿絵と、幅広い作品を数えきれないほど残し、それがどれをとっても見事な出来栄えなのですから人間業とは思えません。特に晩年の作品にもエネルギッシュなものが多数あり、年齢など気にしてはいられないと励まされる思いです。

すみだ北斎美術館は、ピーター・モースコレクション、楢崎宗重コレクション、そして美術館独自で収集したコレクションと、3つの主要なコレクションを所蔵しています。門人の作品を含めると1800点にもなるといいますから、これを軸に今後開催される企画展が楽しみです。

耳よりな関連イベントなど

すみだ北斎美術館は展示だけでなく、収集保存、調査研究、情報提供、教育普及など、広範囲にわたって北斎生誕の地にふさわしい事業を展開し、江戸博はじめ近隣の文化施設と共に墨田区に賑わいをもたらすことが期待されています。

東京スカイツリータウン、ソラマチ内の「すみだ水族館」では、すみだ北斎美術館の開業に合わせて、10月1日(土)から1月9日(月)まで、葛飾北斎にまつわる体験プログラム「北斎は、さかな好き？」が開催されています。北斎が描いた生き物たちの魅力をここでも発見できることでしょう。

江戸博では、常設展示「江戸の美」のコーナーで北斎に注目した展示を12月25日まで行っていました。また江戸博とすみだ北斎美術館の常設展がお互いのチケットで2割引になるとか、すみだ北斎美術館の半券で郵政博物館の常設展が無料になるというお得な情報もあります。今後も各方面とのタイアップを期待したいところです。

※参考資料：「建設通信新聞」公式記事ブログ、『東京人』no.378

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依

新 年 祝 辞

江戸東京博物館　館長　**藤森照信**

明けましておめでとうございます。

昨年は多くの入館者を迎えることができました。また、行幸啓と都知事視察も無事に終えました。これも友の会をはじめ、館につながる人たちの日頃の活動のおかげと感謝しています。

昨年のニュースとしては、浮世絵収蔵の充実があり、歌麿、写楽、国芳の名品を得ることができました。とりわけ、わが館のロゴマークである写楽による左目の描かれた浮世絵(「市川蝦蔵の竹村定之進」)の入手はうれしかったです。

本年は2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて建物の改修が始まり、一部の活動を休止することになりますが、その間、2020年に向けての仕込みを開始しますので、これまでどおりのご支援をよろしくお願いいたします。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　**畠中　勇**

明けましておめでとうございます。

本年は10月から江戸博が半年間の全館休館、それに続いてさらに1年間、ホールや会議室などの使用が不可となります。このことは、友の会事業に大きな影響を与えることとなり、現在役員会などでその対策を鋭意検討中です。基本的には博物館休館中であっても友の会の活動は休止せず、館外に会場を確保し、見学会などの館外事業を行い、会報『えど友』の発行も続けます。

また、江戸博休館中の措置として会員資格を6カ月延長しましたが、その結果半年分の会費収入がなくなり、財政的にも大きな影響が出てくるなど、例年に比べ課題の多い年になります。

着実に事業を実施していくために、皆さまのさらなるご支援とご協力を心からお願いいたします。

会員からの投稿

お気に入りの浅草

田辺友紀子

１年半ほど前から茨城の実家を出て、東京暮らしを始めました。京成線沿いで思ったよりも価格が安く、私の我儘な要求を満たしてくれる奇跡のような物件が見つかり、ベランダからはなんとスカイツリーが見えます！　夜景や星を眺めながら、片手にビール～最高じゃないですか！これぞ、The 東京暮らしではないですか！　駅が目の前で、ベランダでたまに電車に乗っている人たちと目が合うことなんて気になりません。それも一期一会？！　もちろん、高層マンションとかではあるはずもなく４階です(笑)。

こうして、新しい生活が始まりました。東京で働く私にとっては、通勤が短いのと終電をあまり気にせず暮らせるのが何よりも嬉しい。そんな私が時折行きたくなるのが、夜の浅草寺。昼間とはうって変わって、仲見世も閉じられ、人もまばらな閑散とした空気感と、ライトアップされた五重塔や本堂の存在感と重厚感がたまらない。遠くにはカラフルに点滅するスカイツリー！　オレンジ色のライトに照らされ、幻想的な世界へと誘われているような感覚に陥る伝法院通りも私のお気に入り。ホッピー通りで気心の知れた友人たちと飲んだ後、ほろ酔い気分で歩くと、もう最高の気分！　そんな最高な気分にさせてくれる浅草！　そんなに愛してやまない浅草なのに…(泣)。

数年前に行った、毎年７月９、10日に浅草寺で行われている「ほおずき市」。特に10日は「四万六千日」と呼ばれていて、この日に参拝するとそのご利益は、なんと４万６千日分(約126年分)だそうで、境内はほおずきを売る熱気あふれるお兄さんたちや大勢の観光客で賑わっていました。当然、私の気分も高揚し、つい運試しで引いてみました！　おみくじ！　結果は「大凶」…。「あなたのこれからの126年分の運は全部『大凶』ですよ(そんなに生きる？)」と言われた気分…。そこで、もう一人の私が囁いた。「もう１回引けば？このままでいいの？」　気が付けば、２回目の「大凶」引いていました…合掌。さらに、126年分×２＝252年分(当然生きてません…)の不運を背負ってしまったかのごとく重い気持ちになりながらそこを後にしたのはいうまでもありません…。

たかがおみくじ、されどおみくじ。その後、初詣に行ったときも、また「大凶」…。なぜか「大凶」ばかりに巡り合う浅草寺。が、それでも私はいつか「大吉」さんと巡り合うことを信じて、これからも浅草に通うのでありましょう(笑)。近いうちに自転車を買い、もっと気軽に行けるようになるのが今の私のささやかな夢です♪

えど友サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月20日(木)福原実さんの進行で平成28年度総会を行った。参加者10人。

11月15日(火)月番は島田昭さん。人間国宝シリーズとして一龍齋貞水の「細川の茶碗屋敷」、古今亭志ん朝の「火炎太鼓」、および徳光和夫・林家たい平が語る志ん朝の芸風と人柄の思い出話を盛り込んだDVD鑑賞となった。残りの時間で年間活動計画、各月の月番を決定した。参加者13人。

◆藩史研究会

10月14日(金)谷川よしひろさんが「周防国徳山藩」を発表した。元和２年(1616)萩藩毛利輝元の次男就隆(なりたか)が３万４千石を分知されて立藩し、下松(くだまつ)藩となる。慶安３年(1650)徳山藩に名称変更。正徳５年(1715)に萩藩との境の松を巡る万役山(まんにゃくやま)事件をきっかけに、翌年に徳山藩は改易となり、萩藩に召し抱えとなる。しかし享保４年(1719)４代元堯(もとたか)が３万石を復し藩を再興した。明治４年(1871)徳山藩を宗家に返還した。参加者11人。

11月11日(金)杉山正昭さんが「陸奥国弘前藩」を発表した。津軽藩ともいう。津軽為信は小田原征伐の際上洛し、沼津で秀吉に謁見して津軽安堵の朱印状を下付された。関ケ原の役では徳川に味方し、慶長５年(1600)、徳川氏より領地４万７千石を安堵されて立藩。慶長16年には弘前城も築城した。参加者13人。

◆「米屋田中家文書」を読む古文書の会

10月13日(木)米屋久右衛門の書いた明治３年の「町用日記」P192～202まで読む。参加者10人。

10月28日(金)「町用日記」P202～220まで。無届け引っ越しをした差配人が不念書の提出、捨てられていた銭箱の持主が名乗り出、手狭になった扱所(現在の区役所)用に町小間割出銀で土蔵付の家を買う是非を扱所から問われる地主たち、盗賊を取り押さえたとの訴え出など、さまざまなことが記されている。参加者９人。

11月10日(木)今回より米屋久右衛門の書いた明治３年の同家の人宿としての「日記」を読む。P1～13まで。正月から始まった日記には、年頭の挨拶回りが記されているが、その得意先である大名家の数の多さからみて、相当手広く商売していたことがうかがわれる。参加者10人。

11月25日(金)「日記」P13～26まで。参加者９人。

◆江戸東京を巡る会

11月23日(水)五色不動の一つ、目黄不動を安置する永久寺から永井荷風の思い入れ深い投込み寺で名高い浄閑寺を経て、当日が祥月命日にあたる樋口一葉の記念館を見学し、飛不動・長国寺を回ってから二の酉で

賑わう鷲(おおとり)神社に到着。神社の近隣一帯を圧する熊手売りの威勢のいいやりとりや無数の各種の露店に驚いた。参加者42人。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月20日(木)担当は杉山義三郎さん。神田上水堀端の金剛寺は曹洞派の禅刹だったが、中野区上高田に移転した。今は金剛坂にその名を残すのみである。椿山荘裏手にある関口芭蕉庵は龍隠庵と呼ばれ、水神社の別当でもあった。同じ境内の八幡宮は関口台の鎮守で、椿山八幡宮ともいわれた。参加者13人。

11月17日(木)担当は中村貞子さん。目白台の東京カテドラル聖マリア教会の敷地には幕府の歌学方を務めた北村季吟の別荘があったが、図会の頃は大名屋敷になっていた。目白坂を下ると関口台町小学校の正面右手に幸神社がある。目白不動は昭和20年の空襲で焼け、焼失を免れた本尊の不動明王像は、豊島区高田の金乗院境内の不動堂に安置されている。参加者13人。

◆日本の大道芸伝承会

10月14日(金)深川江戸資料館で11月5日(土)に開催されるイベント「にほんの大道芸」へ応援出演するため、発声練習(外郎売り、がまの油売り)のあと、各自演目を練習した。参加者4人。

10月19日(水)発声練習のあと、各自演目を練習した。参加者4人。

11月5日(土)「深川江戸資料館開館30周年記念」及び「日本大道芸・大道芸の会創立20周年記念」イベントへ応援出演した。「南京玉すだれ」「一筆龍」「絵解　地獄極楽」「神霊術」などを披露した。参加者4人。

11月9日(水)反省会。参加者4人。

11月13日(日)「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」へ昨年に引き続き今年も選抜出演した。参加者2人。

◆江戸を語る会

10月29日(土)須賀靖さんが「気になることば、気になること」と題して思いの丈を披歴した。「身の三里四方」、「九尺二間にすぎたるものは紅のついたる火吹き竹」、「起きて半畳、寝て一畳、飯を食べても五合半」「一富士二鷹三茄子」などについて。参加者9人。

◆かっぽれの会

10月12日(水)入門曲「奴さん」の2番(姐さん)をお稽古した。参加者3人。

11月2日(水)「奴さん」の2番(姐さん)をお稽古した。参加者3人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

10月27日(木)まず道灌が建立したという平河天満宮に参拝。次いで道灌が姫の天然痘平癒を祈ったという古社・太田姫稲荷神社とその分社、元宮に参拝し、最後は道灌が江戸城築城にあたり鬼門除けに京都伏見稲荷を勧請したのが始まりという柳森神社に参拝して、解散した。参加者44人。

10月30日(日)1回目と同じコースを巡った。参加者39人。

11月27日(日)寄居にある鉢形城は長尾景春の築城と伝えられ、その景春が主家に反旗を翻した長尾景春の乱(文明8～12年)で、景春与党と対峙したのが太田道灌。「鉢形城歴史館」では解説付きで見学。昼食後、地元ボランティアさんのガイドで、鉢形城址公園内の史跡などをたっぷりと見学した。寄居駅で解散。参加者25人。

12月1日(木)1回目と同じコースを巡った。参加者26人。

◆文士達を巡る会

10月25日(火)顔合せと今後の打ち合せを行った。参加者6人。

11月29日(火)第1回目の地として田端文士村を訪ねる。元々は芥川龍之介が中心と考えられているが、芸術家との交流によって文士村ができあがった。その建物跡地や神社仏閣を巡った。参加者12人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。輪読系のサークルについては定員に欠員がでたとき、先着順で参加できます。

館蔵古文書翻刻だより

◆A班『新古改撰誌記』

御中間は総数500人もおり、その職場は幾多の門衛や各種の出役と多岐に分かれて職場も分散、そして昼夜勤務である。その職場の秩序維持のため各種の法度が出されている。その主要な事項を紹介する。

1．火の元管理を入念にすること。2．博奕、賭け事の禁止。3．喧嘩・口論は固く慎むこと。4．当番の節は手軽な弁当を用意し、酒肴の持ち込みを禁止する。5．衣服は分限に応じ、節倹たること。6．商人への掛け払いは必ず支払うこと。7．役所近辺の町人に失礼の無いようにすること。8．若年の者は手透きの節は筆算・手習其外稽古に心がけること。

友の会めも(開催日と人数)

平成28年10月～11月

◆役員会10月11日(火)15人。11月8日(火)14人。◆事業部会10月4日(火)23人。11月1日(火)24人。◆広報部会10月18日(火)9人。11月15日(火)10人。◆総務部会10月4日(火)17人。10月25日(火)18人。11月22日(火)11人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト10月6日(木)A班8人。B班6人。10月20日(木)A班9人。B班8人。11月3日(木)A班9人。B班8人。11月17日(木)A班9人。B班8人。◆古文書講座　入門編：10月5日(水)午前89人・午後94人。11月2日(水)午前97人・午後88人。初級編：10月19日(水)午前75人・午後67人。11月16日(水)午前77人・午後69人。中級編：10月22日(土)午前45人・午後26人。11月19日(土)午前48人・午後31人。

カット：
佐藤美代子さん

第169回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年10月15日）

幕末～明治の深川

講師　龍澤　潤さん（深川東京モダン館副館長）

はじめに

下町情緒とか深川情緒とかいわれるように、深川は江戸の中でも文化的に少し異なっており、下町人情、時代小説の舞台といったイメージがあります。

深川は江戸時代の初めに開発され、江戸中期以降、大名・町人たちの蔵屋敷が建っていました。「江戸の倉庫・深川」といわれ、今も三井、三菱や帝国、渋沢など倉庫会社があります。明治期になると、近代化と共に工業地帯に変わっていきます。工場は、原材料やできた製品などの物資を大量に運ぶために小名木川、竪川など川沿いに展開していきます。

越中島の成立と展開

近代東京を語る上で、深川エリアを決定的に位置付けるポイントになったのが越中島地域です。

江戸時代初めのころ、小名木川の南側に榊原越中守上がり屋敷があり、越中島の名の由来になっています。正徳元年(1711)ころ、御家人43人が土地を拝領、町屋敷地として整備されます。この地域が劇的に変化したのは19世紀に入って外国船が来航してくるようになってからです。文政年間(1818～30)、長崎や函館ではなく、関東の水戸大津浜にイギリス船が来航したことに幕府は大いに驚き、東京湾の防備を意識するようになります。

天保14年(1843)、武州忍藩(行田)が目白台から越中島に代地を与えられます。江戸深川松平下総守御屋敷の鳥瞰図は建物の格好などが分かるように描かれています。屋敷内部に的が置かれ、弓矢の矢場に見えますが、高い土盛りがされていることから鉄砲大筒を撃つ場所であると考えられます。江戸市中では大筒の調練はできませんでしたが、本所深川は除外され、有名な兵学者佐久間象山の砲術塾もありました。江戸市中でもペリー来航に伴って、物々しい雰囲気をひしひしと感じていたのがこの深川エリアでした。

幕末深川は幕府の調練場となり、軍事拠点として位置付けられました。二代目歌川広重の『絵本江戸土産』には大砲の調練を行っている越中島の様子が紹介されています。それが明治政府に引き継がれ、陸軍の練兵場となります。明治3年(1870)、明治天皇が天覧、初めて君が代が演奏されています。

関東大震災前の大正10年(1921)の段階では、この地域には陸軍省糧秣本廠、東京商船学校、国の有形登録文化財になっている水産講習所、工業試験場、東京帝国大学航空研究所など、国の研究機関が集結していました。住宅のない広い敷地、東京に近く海沿いにあるなどの条件に恵まれたことによります。

隅田川東側河口の造成地が19世紀の「外患」を機に幕府の軍事拠点へ、後に明治政府の軍事・研究拠点へと変貌していった深川の特徴をよく表しています。

大名屋敷から工場へ

江東区をアピールする近代のポイントに、私もここへきて初めて知った言葉ですが「江東四白」といわれる、〇〇工業発祥の地があります。セメントは政府主導の工場が建設、浅野総一郎が引き継いだ浅野セメント(現太平洋セメント)、雨宮敬次郎が民営として初めて手掛けた製粉(現日本製粉)、渋沢栄一らが立ち上げた人造肥料(現日産化学工業)、そして鈴木藤三郎が始めた精製糖(現大日本明治製糖)、これらはいずれも小名木川沿いにあった大名屋敷が転化されたものです。

ここで二人の人物に絞ってお話したいと思います。一人は山梨出身の一代の相場師雨宮敬次郎、南葛飾郡八右衛門新田(扇橋)に製粉事業を開始します。小名木川沿いで初めて煙突を立てたと自伝で自慢しています。その後、鉄道・発電のインフラ関係にまで関わっていきます。そしてもう一人は、日本で初めて機械で精製糖を始めた技術者であり、大発明家(取得特許159件)の鈴木藤三郎です。(※龍澤講師はこの後、鈴木の子息が書いた『黎明日本の一開拓者　父鈴木藤三郎の一生』と、絵が得意だった鈴木本人が描いた絵入りの自叙伝を紹介しながら、スライドを使って、波乱にとんだ彼の半生を詳しく説明されました)

深川に住んだ殿様～

佐賀町の殿様堀田正倫

明治期、深川には8人の殿様が住んでいました。その中の一人に堀田正倫がいます。老中首座堀田正睦の4男で、父の隠居後家督を継ぎ、版籍奉還後は佐倉知藩事となります。明治5年深川佐賀町邸を本宅とし、明治23年、佐倉別邸に寄留するまで20年近くをここで過ごしました。

おわりに

深川のイメージは、大名屋敷が明治以降工場になり、倉庫になり、それに合わせ金融業など経済的な拠点として発展、一方、越中島は研究・防衛拠点となっていました。今の東京の研究・経済拠点は、隅田川の西側がメインになっています。関東大震災後、区画整理によって大きく変貌してしまった深川ですが、それでも江戸の名残、雰囲気を探しに多くの方が訪れています。

レポーターからひとこと

深川生まれの江戸っ子として大変興味深く聴かせていただきました。

参加者133人。

【記録】文・写真：広報部会・岡本　脩

第170回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年11月12日）

公儀の庭・浜御殿の変遷と役割

講師　工藤航平さん（東京都公文書館専門員）

浜御殿の〝すがた〟の変遷

浜御殿（現在の浜離宮恩賜庭園）のある場所は寛永期（1624～44）には海辺の湿地帯で、将軍の鷹場でした。1650～60年代に甲府藩徳川綱重に与えられ、造成して屋敷と庭が造られます。宝永元年（1704）、綱重の子綱豊（家宣）が将軍綱吉の養子となったために幕府に収公され、江戸城奥の延長としての浜御殿となりました。享保９年（1724）に御殿が焼失して再建されなかったため、浜御殿、浜の御殿などと呼ばれていたのが、徐々に浜御庭、浜の御庭、浜庭園などと呼ばれるようになっていきます。ただ、当時売られていた絵図には幕末になっても「浜御殿」と記されており、一般には浜御殿と認識されていたようです。

浜御殿の絵図を時代順に見ていくと、その〝すがた〟が変わっていく様子が分かります。大きく変わっている所が３カ所あり、まず御殿跡地に綱吉・家宣の側室らの屋敷が三棟建てられ、その後池が造られ、明治期になると林になります。庚申堂鴨場は山から田畑、池となり、明治期には水を抜かれます。新銭座鴨場は平地から馬場、池となり、こちらは明治期にも池として残ります。また橋の数や位置も変化しています。このような改変がなぜ必要だったのかというと、将軍の個性だけではなく、政治的な事情があったと考えられます。

浜御殿は19世紀（寛政期以降）に全盛期を迎えたとされ、それ以前の時代（享保期～寛政以前）は低く評価されてきました。特に御殿焼失後は「荒廃してしまった」「荒れるに任せた」などとされています。しかし実際には火災の前から、女中の避難場所となったり、役人の数が大幅に削減されたり、江戸城と同じにという心得・服装が改められたりしています。これらは享保の改革の影響と考えられます。こうして御殿としての機能は縮小されていきますが、庭園の整備や最低限の保全は継続して行われていました。鷹場や調練場の機能も付与され、そちらに特化していきます。つまり、御殿から鷹場へと機能が変化し、それに伴って鷹場としての最低限の機能が保持されたのでした。

鷹場としての再整備

歴代将軍の浜御殿利用回数を見ると、家斉・家慶が突出しているのが分かります。これを年度ごとに見ていくと、家斉が将軍になってすぐに増えたわけではなく、寛政７年（1795）ごろから急増しており、その前は色々な場所へ鷹狩や御成に行っています。

寛政３年ごろより浜御殿が整備されるようになりますが、当時は寛政の改革の時期であり、遊興の場の整備というより鷹場の整備が中心であったのではないかと思われます。一つの事例としては鷹の茶屋があります。ここは寛政７年に建てられていますが、小松川正福寺にあった鷹狩の際の御膳所（将軍の休憩所）を移築したものと考えられます。

庭の整備にも常に鷹場としての管理が第一に意識されていました。鷹のえさになる鳥をおびき寄せるため、７月に植木の刈り込みをするようになり、さらに夏は水草を刈り取り、冬は池の氷を砕いています。

公儀の庭・浜御殿

天保５年（1834）に浜御殿へ招待された大名・幕臣の観遊コースをたどりながら、単なる遊びの場ではない施設がどういった意味を持たされて造られたのかを見ていきたいと思います。まず招待客たちは表馬見所へ集合し、将軍の御成を出迎えます。その後御庭役所に刀を預け、御成御門と御庭口御門を通って庭に入ります。ここからは基本的に反時計回りで回っていきます。

三間橋、八景山、観音堂と回った先には植込があり、色々な植物が植えられています。ここでは田舎の風景を感じ取らせるようにしており、好きな植木を持ち帰ることができました。次の富士見山は現在より海側にあり、ここから見える富士山を借景としています。さらに増上寺、大名屋敷、江戸の町並み、江戸湾の船などが見えることで、江戸の平和、豊かさを感じさせるようになっています。

海手の小橋、御亭山（おちんやま）の腰掛、松の茶屋、燕の茶屋の次が鷹の茶屋（見合所）です。わらぶき屋根の建物の中には農作業の道具、いろりがあって、招待客にとって非日常の世界である農村を思わせる造りになっています。御泉水では釣台からの釣りを楽しみ、高見所での昼食の後は馬場、新銭座の菜園などを回ります。

庚申堂鴨場では鴨をおびき寄せての鷹狩を行いますが、その一部に田圃（たんぼ）があり、農村から百姓を連れてきて田植えをさせています。これは支配する人々に領民の民情を認識させるためです。さらに織殿（おりどの）では日本各地の色々な織物を織る様子、海辺では佃島などの漁民による漁の様子、塩竈（しおがま）では製塩の様子がそれぞれ見られるようになっています。

このように、浜御殿には全国各地の産業が配置され、様々な景観が再現されています。これは全国統治者としての将軍の権威を高める演出といえます。ですから、享保期以降の鷹場としての整備も含め、単なる「将軍の庭」ではなく「公儀の庭」といえるのではないでしょうか。

レポーターからひとこと

これまで遊びや接待の場だとばかり思っていた浜御殿ですが、別の側面があることに気付かされました。今度は当時の招待客のコースをたどって歩いてみたいと思います。

参加者126人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 28 年 10 月 2 日）

定番・江戸城周辺探訪
ーその1（本丸）ー

晴天の日曜日、東京駅丸の内北口に集合して、江戸城大手門から東京メトロ竹橋駅まで歩きました。江戸城は、慶長11年(1606)に大名を動員した「天下普請」が始まり、寛永年間(1624～44)に城全体が完成しました。完成当時の姿に思いをはせて江戸城跡見学に出発です。

大手門に入るまでの見どころ

ビルが林立する大手町のオフィス街を皇居東御苑へ向かいます。江戸城正門であった大手門が入口です。この辺りには道三堀、評定所、伝奏屋敷など、幕府の役所や施設が置かれていました。日比谷通りを横切って和田倉橋を渡ると、清々しい空間が広がる和田倉噴水公園です。天皇皇后両陛下御成婚を記念して造られ、皇太子殿下御成婚の際には新たに落水・流水施設が増設されました。

▲和田倉噴水公園

大手門から江戸城玄関へ

桔梗濠を渡って大手門に到着です。登城する大名は門前の下馬所で乗り物を降りなければなりませんでした。戦を想定した枡形構造になっていて、譜代10万石以上の大名が警備に当たりました。現在の櫓門は昭和42年(1967)に再建されたものです。明暦3年(1657)の銘のある鯱（しゃち）が桝形広場に置かれていますが、明暦の大火後に再建された櫓門を飾っていたものといわれます。

受付で入園票を受け取って進むと、こぢんまりとした三の丸尚蔵館があります。開催中の「書の美、文字の巧」の展示を急いで見学しました。ここからは警護目的の三つの番所と、巨大な石垣が残る三の門跡、中之門跡、中雀門(玄関前門)跡が続き、時代劇の場面を思わせます。御三家だけが駕籠で通ることが許されていた三の門付近には、同心番所と百人番所があり、中之門を進むと玄関までの最後の番所である大番所があって、警備の厳重さをうかがい知ることができます。

▲百人番所

本丸の遺構を偲ぶ

天下支配の中枢であり将軍の住居でもある本丸は、面積1万坪、11の隅櫓と15の多聞櫓があり、天守閣は5層からなる日本一の城でした。

本丸南端の高所に建つ富士見櫓は、明暦の大火の2年後の万治2年(1659)に再建された江戸城最古の遺構です。高さ15.5mでどこから見ても美しい姿が望めたことから八方正面の櫓といわれました。忠臣蔵の重要な舞台、松の大廊下跡は本丸の南西にありますが、その場所を示す石碑が立つのみです。鉄砲、弓矢を納め、万一の時には敵を狙い撃つ鉄砲狭間も備えた多聞の一つである富士見多聞が蓮池濠を見下ろす場所にあります。将軍がここで富士を見つつ休息したので、「御休息多聞」とも呼ばれたそうです。江戸城には落城に備えた抜け穴が七つあったという話があります。その出口の一つという説がある石室を左手に見て、天守台に向かいます。

家康が建造した城は白漆喰で雪山のように輝いていたといいます。明暦3年の大火で焼失した天守は、家光の3度目の建て替えによる寛永天守で、棟高51m、壁は銅板黒塗りだったそうです。現存の石垣は瀬戸内海から運ばれた花崗岩ですが、この上に築かれるはずだった天守は保科正之の進言で断念され、再建されることはありませんでした。創建当時の壮麗さを偲びつつ海抜20mの天守台石垣に上り、広大な芝生が広がる本丸御殿跡を眺めました。

二の丸跡から竹橋へ

展望台から緑豊かな二の丸と大手町のビル群を望み、海が見えることからその名が付けられた汐見坂で白鳥濠を右に見つつ本丸の石垣と松の調和を楽しみました。世子が大奥で育った後に移り住んだ御殿が二の丸で、二の丸庭園は9代将軍家重の時代の絵図面を参考に昭和40年に復元された風雅な庭園です。

平川門は枡形が完全な形で残り、門外には築城時の擬宝珠が残る木橋もあるそうですが、脇には死者や罪人のための不浄門が垣間見えます。大奥女中江島や浅野内匠頭もここから出されたそうです。有事の際、はね上げて本丸への通行を遮断する北桔橋（きたはねばし）と西桔橋（にしはねばし）がありました。皇居東御苑の出入口となっている北桔橋では、はね上げ用の金具を見ることができます。また、よじ登る敵を打ち落とせるように工夫された石垣も見

▲平川濠と石垣

ることができます。皇居東御苑を後にして、旧竹橋が架かっていた位置を確認しつつ解散となりました。

参加者154人。

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成28年11月25日）

特別展「戦国時代展 A CENTURY OF DREAMS」

特別展「戦国時代展」の観覧会が11月25日17時から1階ホールで行なわれました。担当された齋藤学芸員は見どころ解説に先立ち、なぜここ江戸博で戦国時代展をという疑問に対し、首都圏には数多くの博物館や美術館がありますが、歴史展を開催するにはここ江戸博が最も適していること、それに先般退任された竹内館長が前々から、戦国時代展開催を要望していたことによるとのことでした。解説のあと、展示室に移動し、ゆっくり観覧しました。

戦国時代の始まりは、応仁・文明の乱(1467-77)からというのが通説ですが、それより前の享徳３年(1454)の享徳の乱から始まったという最近の新説のもとに展示されています。

では終りはいつか、ということですが、これについては始まりよりも意見が多く分かれています。早い方では織田信長の入京(1568)から遅くは大坂夏の陣(1615)まで約50年の長きにわたっており、この展示会では元亀４年(1573)の将軍足利義昭の京都からの追放を終りとしています。

たくさんの人馬が描かれている有名な川中島の合戦の図、いろいろな屏風絵が描かれたそうですが、展示されている武田信玄と上杉謙信の一騎打ちがどう描かれているか確認してみるのも面白いでしょう。描かせた藩、描かせた意図などによって同じ描写はないそうです。その信玄公の顔形は気骨たくましい勇壮な姿として世に知られていますが、別の絵もあって、どうもそちらの方が本当の信玄ではないか、ということです。信玄の実弟、逍遥軒の筆によるもので、どちらかといえば信長に似ています。

戦国時代は群雄割拠、下克上の時代で地方の大名たちが覇権を目指し、戦乱に明け暮れていたイメージが強かったのですが、それだけではなくて、一つのまとまりのある国家であった、という学説が出てきています。つまり、朝廷や室町幕府という中央と地方の大名たちは結びついていて、権威や権力を付与する文書、例えば、御旗の新調を許可する綸旨、官職を授ける書簡、ある特定地域の支配を認める書簡、和睦を調停する書簡など多くの史料が展示されています。文化交流も盛んに行われたようで、中央から大名たちへ、あるいは大名同士でやりとりした刀剣、美術工芸品、諸道具などが並べられています。一方、海外との交流も活発で、北方ではアイヌ、西方では明や朝鮮、そして東南アジアとの交易により国内に入ってきた歴史的遺物の展示もあります。

このように、戦国時代は次の安土桃山時代、江戸時代を準備した時代、まさに“夢の時代”でした。学芸員が表現した夢の時代という言葉を聞いて、この特別展のタイトルの傍らに小さく並んでいる横文字の意味が分かりました。　　参加者115人。

【取材】文・写真：広報部会・福島信一

江戸博クリップ

江戸博と私

経理係　神原里佳（かんばら りか）

初めて江戸東京博物館(以下､江戸博)を知ったのは2013年４月。派遣職として展示企画係の仕事を紹介されたのがきっかけです。博物館という職場は踏み入れたことのない世界でしたが、なぜか江戸という言葉に非常に引かれ、英文事務という業務もあり、ぜひ江戸博で働いてみたいと希望しました。

展示企画係では、学芸員という世界を初めて知り、特別展の始まりから終わりまでの表舞台・裏舞台の中で働く職員の忙しさを知り、そして歴史や美術の魅力や博物館の世界を知りました。その中で、特別展行幸の折に担当した「天皇陛下へのお茶出し」という特別な経験は、一生忘れません。展示企画係は、江戸博での初めての職場で、離れがたい特別な部署でした。

派遣期間の２年は瞬く間に終了しました。しばらくして江戸博の職員募集を知り、また江戸博で働きたいと強く希望し、応募しました。なんとか職員にしていただき、2015年７月から経理係でお世話になっております。

経理係では、契約を担当。一般企業の経理という典型的な業務とは全く違う仕事です。契約書ができるまでの起案・仕様書・内訳書などの書類に戸惑いました。財団・江戸博の事業の全体像が見えない中で理解するまでに時間がかかりました。最近は、各事業部署の流れと動きが認識でき、契約書に付ける仕様書の重要性を実感。その正確性を求めることが課題となっています。そのために各部署の業務をさらに知り、起案に必要な要素がすべて書かれているかを確認するよう心掛けています。正直、始めた頃は真っ暗闇の中でしたが、進むべき方向がつかめて光が見えてきたと感じます。

江戸博に巡り合えたこと、そして、江戸博で働けることに感謝しています。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉙

［駒場野から正一位子の明神社］

猿楽塚

今回は主に目黒区の北部を巡ります。朱引のすぐ外側に当たる地域で、坂歩きや川歩きが楽しめます。歩いたのは雨続きの天候も一段落した10月の秋晴れの日でした。

駒場野から氷川明神祠

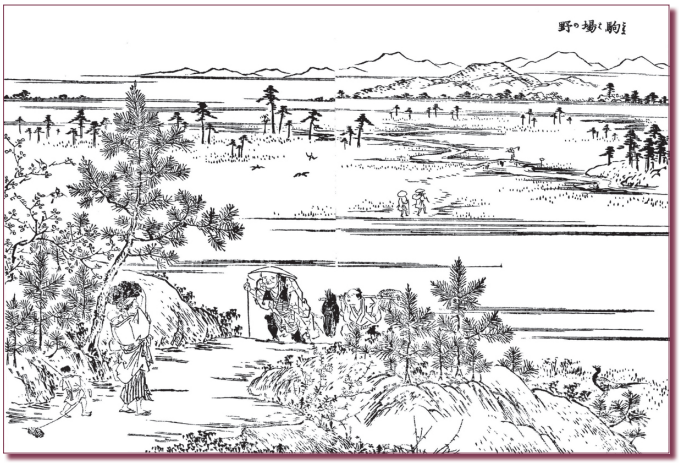
井の頭線駒場東大前駅で下車。現在東京大学教養学部や駒場公園などがある一帯はかつて駒場野と呼ばれ、挿絵で描かれているように広大な原野でした。江戸時代には幕府の御狩場や御用屋敷、明治以降は陸軍の演習地や軍事施設がありました。駅西口から坂を上ってすぐの駒場野公園は明治11年(1878)に駒場農学校が設立された場所で、その名残がドイツ人教師オスカー・ケルネルにちなむケルネル田圃(たんぼ)です。また樹木が多数生い茂り、身近に自然を感じられる気持ちの良い公園になっています。公園南口から出て突き当たる淡島通りの南側は、鷹狩りに訪れた将軍の休憩所や鳥見役人の詰所である御用屋敷があった所で、駒場高校手前の脇道を入ると御用屋敷跡の説明板がありました。

ここから道なりに坂を下っていくと玉川通りに出、左方向に少し進むと氷川明神祠(現上目黒氷川神社)の鳥居があります。かつてこの通りは大山詣でに向かう大山道であり、鳥居の後ろには天保13年(1842)の道標が残されています。急な石段を登ると本殿の隣に富士浅間神社があります。目切(めきり)坂にあった目黒元富士を末社としたもので、富士講の石碑も移されて祠の脇に立っています。また、富士浅間登山道も造られており、7月1日の山開きには氏子の登る浅間神社例大祭が行われています。

天満宮から去我苦塚

神社前の歩道橋を渡って山手通りを進み、目黒橋の所から目黒川左岸沿いを歩きます。両岸は桜並木で、花見の時期には大勢の人が訪れます。天満宮(現北野神社)は地図に載っておらず探すのに手間取りましたが、天神橋先の裏道を入った所にありました。菅原道真公の像を安置する祠と、石剣を収めたという稲荷社が並んで建っています。現在は上目黒氷川神社に合祀され、管理も同社で行っています。

さらにもう一本裏手の道を進むと、石臼の目切り名人・伊藤与右衛門が住んでいたという目切坂の上りになります。かつて坂の途中には広重の『名所江戸百景』に描かれた目黒元富士がありました。坂上左手には旧朝倉家住宅(重要文化財)が一般公開されていますので、ちょっと寄り道をすることにします。東京府議会議長などを歴任した朝倉虎治郎が大正8年(1919)に建てたもので、屋敷の各部屋には様々な意匠を凝らした障子・襖・欄干・床の間などがあり、とても見応えがあります。また多くの石灯籠を配した庭園も見事です。



▲長谷川雪旦　駒場野

裏口から出ると代官山ヒルサイドテラスの敷地で、その一角に去我苦(さるがく)塚(猿楽塚)があります。古墳時代末期の円墳ですが、ケヤキの大木が全体を覆い隠していて形は定かでありません。大正時代に朝倉家により猿楽神社が建立されており、正面の鳥居から山道を登ると塚の頂上に祠があります。

足毛塚から正一位子の明神社

旧山手通りから駒沢通り手前を左折、東横線沿いの道を進むと目黒川に架かる日の出橋に突き当たり、橋手前の下流側からは蛇崩(じゃくずれ)川の合流点が見えます。地上から目にすることができるのはここだけで、あとはすべて暗渠(あんきょ)となっており、流路の上に蛇崩川緑道が設けられています。山手通りを渡った中目黒駅の脇から緑道歩きを開始。駅周辺はやや狭い感じですが、住宅街に入ると道幅も広がり、両側の草花が楽しめる快適な散歩道になります。上天気の日に歩けば気分爽快になること請け合いです。

しばらく歩いて目黒区と世田谷区の境界で左折すると、1本南の通りの真ん中に浮島のようになった草むらがあり、足毛塚(芦毛塚)の石碑が立っています。源頼朝あるいは地元の領主・北条左近太郎が騎乗した芦毛馬の埋葬された場所とされています。またこの付近は「馬牽沢(うまひきざわ)の旧跡」とされ、こちらは頼朝が奥州征伐の時に渋谷八幡宮に献上する芦毛馬を牽いたとも、前述の芦毛馬のことであるとも伝えられています。この言い伝えにより江戸時代にはこの一帯の地名が馬引沢村となり、現在の上馬・下馬の町名の由来となっています。

再び緑道に戻って進むと、左手に正一位子(ね)の明神社(現駒繋(こまつなぎ)神社)があります。やはり頼朝が奥州征伐の際に境内の松の木に芦毛馬を繋いだという伝説があり、明治以降正式名称が駒繋神社になりました。石段を登った神楽殿の脇には「3代目駒繋の松」の石碑がありますが、4代目は現在成育中とのことで、まだ植えられていません。裏の鳥居から通りに出て東横線祐天寺駅に向かいました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

◆第３期の日程

古文書講座の今年度第３期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：1／11(水)、2／1(水)、3／1(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1／18(水)、2／15(水)、3／15(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：1／21(土)、2／18(土)、3／18(土)

- 時間：各講座とも、午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展　「江戸と北京　18 世紀の都市と暮らし」

◆18世紀、江戸の人口は100万人を超え、大都市として発達を遂げました。北京もまた清朝の首都として、拡大し繁栄を極めた時代でした。本展は、18世紀を中心に、そんな江戸と北京の歴史や都市生活を比較するという、今回が初めての企画です。日本橋を描いた絵巻「燕代勝覧」(ベルリン国立アジア美術館蔵)も展示されます。

- 開催日時：２月24日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説　江里口友子学芸員
  17時30分～19時：特別展示室自由観覧
- 申込締切：２月13日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／１階特別展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】瀬谷葉子・玉木達二(事業部会)

友の会セミナー

第 173 回「江戸っ子が惚れた赤穂事件、その後」

講師　菅野俊輔さん(江戸文化研究家、歴史家)

◆元禄16年(1703)２月４日、この日は何の日？　江戸博友の会会員の方は知っていますよね。気の早い江戸っ子は、２月16日には、中村座で赤穂事件をテーマにする『曙曽我夜討』を上演。しかし、３日で禁止。10月室鳩巣が『赤穂義人録』を完成させる。宝永３年(1706)大坂、竹本座で近松門左衛門が『碁盤太平記』を初演、延享５年(1748)同じ竹本座で竹田出雲作『仮名手本忠臣蔵』が初演。華やかな元禄文化、しかし、元禄地震や富士山の宝永大噴火、現在と同じ災害に見舞われました。当時の人々がどのように事件を受け止め、災害を乗り越えていったかを語っていただきます。

◆講師略歴：かんの・しゅんすけ
1948年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、早稲田大学エクステンションセンター、毎日文化センター、読売・日本テレビ文化センターで古文書解説講座の講師を務める。講演、テレビ出演、時代考証、著述など幅広く活動。著書・監修書は『古地図と名所図会で味わう江戸の落語』、『図説世界を驚かせた頭のいい江戸のエコ生活』(ともに青春出版社)『江戸っ子が惚れた忠臣蔵』(小学館)、『大江戸「古地図」大全』(宝島社)など多数。

- 開催日時：２月25日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：２月16日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】大森美恵子(事業部会)

第 174 回「現代の刀匠、刀造りを語る」

講師　吉原義人さん(刀匠)

◆日本刀は、日本人と共に長い歴史を歩み、数多くの刀が今に伝わっています。それは刀が武器として優れていただけでなく、時代時代の鍛冶職人が芸術へと高め、多くの人々を魅了してきたことによります。今回は、作刀の実際をベースに、日本刀の魅力や現在の国際的な活動の状況などをお話していただきます。講師への質問を募集しますので、申込はがきにご記入ください。

◆講師略歴：よしわら・よしんど
昭和18年(1943)世田谷区生れ、葛飾区在住。小学生時代から祖父初代吉原国家について刀造りを手伝う。昭和40年文化庁認定刀匠、昭和57年無監査認定、メトロポリタン美術館、ボストン美術館が買い上げ。伊勢神宮の御神刀の指名を３度受ける。東京都指定無形文化財保持者。『現代作刀の技術－ The Craft of the Japanese Sword』など英語版の著書多数。

- 開催日時：３月11日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：２月27日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明・川上由美子(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第 11 回 地域文化探訪・学習会　(平成 28 年度 第２回)

目黒区めぐろ歴史資料館を訪ねる

◆「目黒区めぐろ歴史資料館」は平成20年に開館しました。それまでは五本木２丁目の守屋教育会館内にあった郷土資料室で調査研究や資料収集を進めていましたが、旧目黒区立第二中学校の廃止に伴い、その跡地施設へ移転して新しく生まれかわりました。古代から現代に至るまでの目黒区の歴史が分かりやすく展示されて充実しています。

- 開催日：２月５日(日)13時30分～14時　受付

- 開催場所：目黒区めぐろ歴史資料館
  （目黒区中目黒３−６−10）
- 学習：14時〜15時30分
  館の沿革・特徴などの話を交えながら常設展・企画展の見学をさせていただきます。
- 交通アクセス：東急東横線または東京メトロ日比谷線「中目黒駅」下車「正面改札」を出て「山手通り」右（目黒駅方面）へ徒歩12分。　＊駅前の山手通り反対側バス停③か④東急バスの利用も可能です。「目黒警察署前」下車 徒歩戻って５分
- 申込締切：１月23日（月）必着
- 定員：50人**（会員のみ）　＊定員を超えた場合は抽選、**
  ご希望に添えないこともあります。
- 参加費：500円（当日払い）

【企画担当責任者】清水昌紘（事業部会）

第9回「えど友研究発表会」の発表者を募集します

ご好評をいただいております「えど友研究発表会」を今年度も行います。発表会の主旨は、長年の研究・調査の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、質疑応答や討議を通じ会員相互の交流を深め、友の会の一層の活性化に資するというものです。

発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業などの宣伝・広報に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、講演料などのお支払いは致しません。２テーマを予定し、１テーマにつき質疑応答を含め１時間程度の予定です。

発表会は８月１日（火）の午後１時から江戸博１階会議室で開催予定です。日頃の成果発表に奮ってご応募くださるよう発表者を募集します。

発表を希望する方は、はがきに「発表会応募」と明記し、氏名、会員番号、電話番号、テーマを書いて事務局宛お送りください。折り返し「えど友研究発表会申込書」をお送りしますので、所要事項をご記入の上事務局へご返送ください。同申込書の提出をもって正式の応募といたします。応募締め切りは５月11日（木）です。なお応募多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては６月上旬に応募者にご連絡いたします。

【企画担当責任者】小林弘明（事業部会）

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展
「戦国時代展 A Century of Dreams」

会　期：11月23日（水・祝）〜1月29日（日）
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●（注）割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展
「江戸と北京　18 世紀の都市と暮らし」

会　期：２月18日（土）〜４月９日（日）
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生900円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●（注）割引を受けられる同伴者は１人だけです。

企画展のご案内

●徳川将軍家の婚礼

会　期：１月２日（月）〜２月19日（日）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●「戦時下東京の子供たち」

会　期：３月７日（火）〜５月７日（日）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

１月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

２月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

催事のお申込方法

◆**普通はがき**に、
①催事名（略名可）・開催日
②会員番号**（必須）**
③氏名（同伴者連記）
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒 130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日（10 時〜12 時、13 時〜17 時）**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第 95 号
平成 29 年１月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇（会長）　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１　電話 03-3626-9910